



No. 54

# AΛEΞANΔPEIA

恵泉女学園大学図書館報

特集 わたしの「メンター本」

## 『読書の方法：なにを、どう読むか』 吉本隆明著 光文社 2001年

中村晋吾

今の学生は本を読まないとよく言われるし、文学について授業をしている感じからしても、実際にそうだと思う。特に、具体的な情報を調べるのではない、目的を持たない漫然とした読書をする習慣のある人は、かなり減っている。これを若者の怠惰やスマホ依存などの問題などのせいにしてしまうのは簡単だが、どうもそれだけでは割り切れないものも残る。

私が小説とか文学というものに興味を持って読み始めたのは中学生の終わりのころだったと記憶している。この時期の「読書」というのは、それまでのそれとは根本的に異なっていて、「陳腐な日常からは想像もつかない認識や世界が描かれているのではないか」といった期待感、あるいは一種の渴望感によるものだった気がする。これは裏を返せば、日常生活や周囲の大人たちの話に心底飽き飽きし、そういうものから隔たった世界を無意識に求めていたということなのかもしれない。

ということは、現代の学生は現状に満足し、周囲の大人に不満などなくなったのかというと、やっぱりそういう話でもないように思う。ひょっとすると、YouTubeやSNS上にいるような、いわゆる「推し」や「アルファ」の存在の発言が、そういうものの代替役を果たしているのではないかと思えることもある。どうにも、頼りなさげな代替だが…。

とはいえ文学者としての私は、日頃から本や小説を読んでいるようなタイプではない人に向かってこそ、語りかけていかなければならないように思っている。それは表題に挙げた書物の著者・吉本隆明から、自分が受け継いでいこうと思っている態度である。

(日本語日本文化学科 教員)



『読書の方法：  
なにを、どう読むか』  
吉本隆明著  
光文社 2001年

特集 わたしの「メンター本」

『読書の方法：なにを、どう読むか』 中村晋吾

何がわたしを生きしめるのか 玉井綺音

あなたの背中を押してくれるビジュアルな「メンター本」たち

図書館で「メンター」について調べてみよう！

わたしが選んだ1冊は『何が私をこうさせたか：獄中手記』(金子文子/著 岩波文庫 2017年)です。この本は、天皇暗殺計画の首謀として死刑判決を受けた金子文子が、天皇の恩赦を退け獄中で23年の生を終えるまでの人生の一部が綴られた手記です。

端的に言うと、金子文子の一生は、「わたし」というひとりの人間として生きていくために闘った日々でした。この手記を読むと、虫けら以下でも以上でもなく、ひとりの人間としてそのままの価値を認められ、人間的に生きていく権利を当たり前のこととして享受することが難しい世の中であって、家族という単位でも日本社会という単位でも、社会的弱者として位置づけられてきた金子文子という人物の中に宿る1人の「少女と女性」が生き抜いてきた姿が浮かんできます。それは、外側から聞こえてくるものではなく、ページをめくるごとに自分の内側から聞こえてくる心臓の音のように温かく、時に切なく響きます。

ここでは金子文子の生涯で起きた出来事について割愛しますが、この手記の中で特に印象的だった文章について、2箇所挙げたいと思います。1箇所目は、金子文子の自然観がわかる部分です。文子は精神的な息苦しさを覚えると、山に登り、霞の中にぼかされた村を見下ろします。小高い山から見える景色は、人の思惑から乖離したのどかさを呈し、それを眺めながら「自分がほんとは生きて生きているような」気持ちを味わいます。「……ゆったりとした気分になって草の上にごろりと横わって、空を眺める。深い深い空だ。私はその底を知りたいと思う。(p. 156, 原文ママ)」というくだりが、わたしは大好きです。人が許さなかったありのままの自分を受け止めてくれる自然、その自然を心のよすがにし深く愛する文子のまっすぐな思いが伝わってきます。

## 「何がわたしを生かせるのか」

玉井綺音

(日本語日本文化学科4年)

2つ目は、彼女が気づきを得、自尊心を持って生きていく志を固める感情を綴った箇所です。「が、私は今、はっきりとわかった。……(中略) いうところの偉い人間なんてほどくだらないものはないということ。人々から偉いといわれることに何の値打ちがあろう。私は人のために生きているのではない。私は私自身の真の満足と自由とを得なければならないのではないか。私は私自身でなければならぬ。……(中略)私は私自身の仕事をしなければならぬ。そうだ、私自身の仕事をだ。しかし、その私自身の仕事とは何であるか。私はそれを知りたい。知ってそれを実行してみたい。(p. 388, 原文ママ)」

偉い人間になることを目標にして苦学してきた文子は、偉い人間という「社会的強者」になることの虚しさを悟ります。人々の視線にかたどられた虚栄の器となることよりも、自分自身の自由を確立するという個人の仕事の意味に気がついた文子は、「私」という個人の道歩み出しながらも、同時に自分と同じような人々に通じる道を切り開いていきます。

「私は私自身でなければならぬ。私自身の仕事をしなければならぬ」という文子の言葉は、わたしの人生の指針となるものです。「私」という1語に込められた力強い思いは、果たして何を形作り、どのような道へと導くのか。それがわかるまで、わたしは遠回りをしながらでも、時には道を間違えながらでも、一步ずつ進んでいくでしょう。

「何が私をこうさせたのか」、その真実をわたし自身の言葉で語る事ができる日まで。

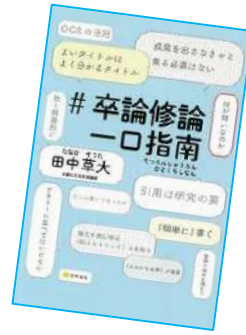


『何が私をこうさせたか：獄中手記』  
金子ふみ子著 春秋社 2005年



わかりやすく  
すぐに役立つ  
アドバイス満載。  
10000字のレポートも  
もう怖くない！

『論理的な文章の書き方が  
面白いほど身につく本』  
西村克己著  
中経出版 2006年



ポイントをつく  
ひとことアドバイスに  
頭と心が整っていく！

『#卒論修論一口指南』  
田中草大著  
文学通信 2022年

# Mentor

あなたの背中を押してくれる  
ビジュアルな「メンター本」たち



『イラストで読む  
ギリシア神話の神々』  
杉全美帆子著 河出書房新社 2017年

「わかりやすさ」と  
「くわしさ」が  
見事に両立した  
シリーズ！



『イラストで読む  
ルネサンスの巨匠たち』  
杉全美帆子著 河出書房新社 2010年

様々な地図を見るだけで  
不思議と日本の歴史がわ  
かってくる。



『東アジア地図帳：  
日本の居場所がよくわかる』  
アイランズ編  
草思社 2011年

コンパクトだがカテゴリーや  
色分けで、「祭りと人間」を  
考えさせる工夫がされている。



『世界の美しい色の祭り』  
渡部隆宏著  
エクスナレッジ 2018年

掲載された全ての手話を  
完全イラスト化。  
始めるなら今！



『はじめての手話：  
ひとめでわかる手話の基本』  
山本智子著  
日東書院 1998年

## 図書館で「メンター」について調べてみよう！



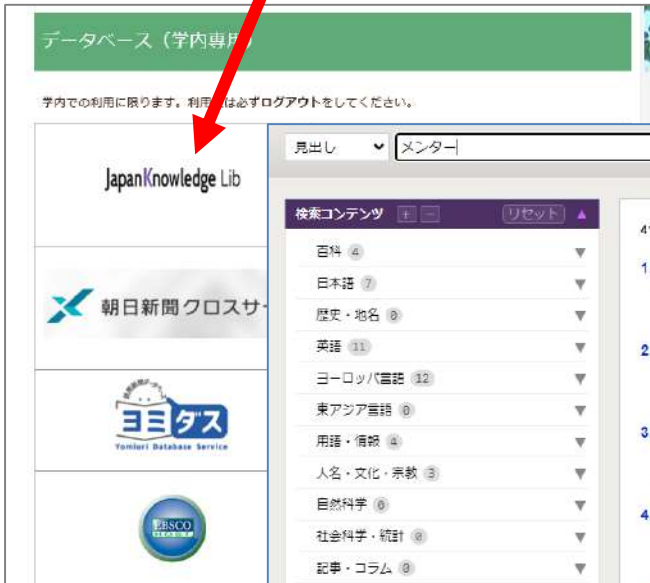
今回の図書館報54号の特集記事のテーマは「メンター本」。イメージしたのは学修や研究の心強いサポーター、また読者の人生にも付き添う「師」の様な本でした。

一般には新入社員を導く先輩を「メンター」と呼ぶこともありますが、「メンター」という言葉自体の意味や語源は本来どのようなものなのでしょうか？

図書館のデータベース「Japan Knowledge Lib」でこの言葉を調べてみましょう。

「Japan Knowledge Lib」は『日本大百科全書』（毎月更新）、『現代用語の基礎知識』、『大辞泉』等の辞書群を横断検索できる便利なデジタル辞典です。

### ①図書館のHPより「学内データベース」にアクセス。 「Japan Knowledge Lib」を選択。



### ②Japan Knowledge Libで「メンター」を検索した結果一覧。 様々な辞典に掲載されている「メンター」の解説が読める。



### 図書館にある他の参考図書も使い、調べた結果をまとめてみると「メンター」とは……



テレマコスとメントール(右側)

賢明で経験豊かな助言者。  
指導、教育、助言など、メンティー(被支援者)の成長・発達を助ける働きをする人をさす。  
ギリシャ神話に登場する賢者「メントール」を語源とする。  
オデュッセウスの親友であったメントールが、彼の息子テレマコスを見・育成・支援したことに由来する。テレマコスが父のオデュッセウスの探索に出た時、女神アテナは、この賢人に姿を変えて彼に付き添った。

#### 参考にした図書館の資料

- ・『有斐閣 現代心理学事典』(Japan Knowledge Lib)
- ・『図説ギリシア・ローマ神話文化事典』  
ルネ・マルタン監修 松村一男訳 原書房 1997年 (R164.8/Z)  
“The Oxford English Dictionary” 2nd ed. Clarendon, 1989年 (R833/O)